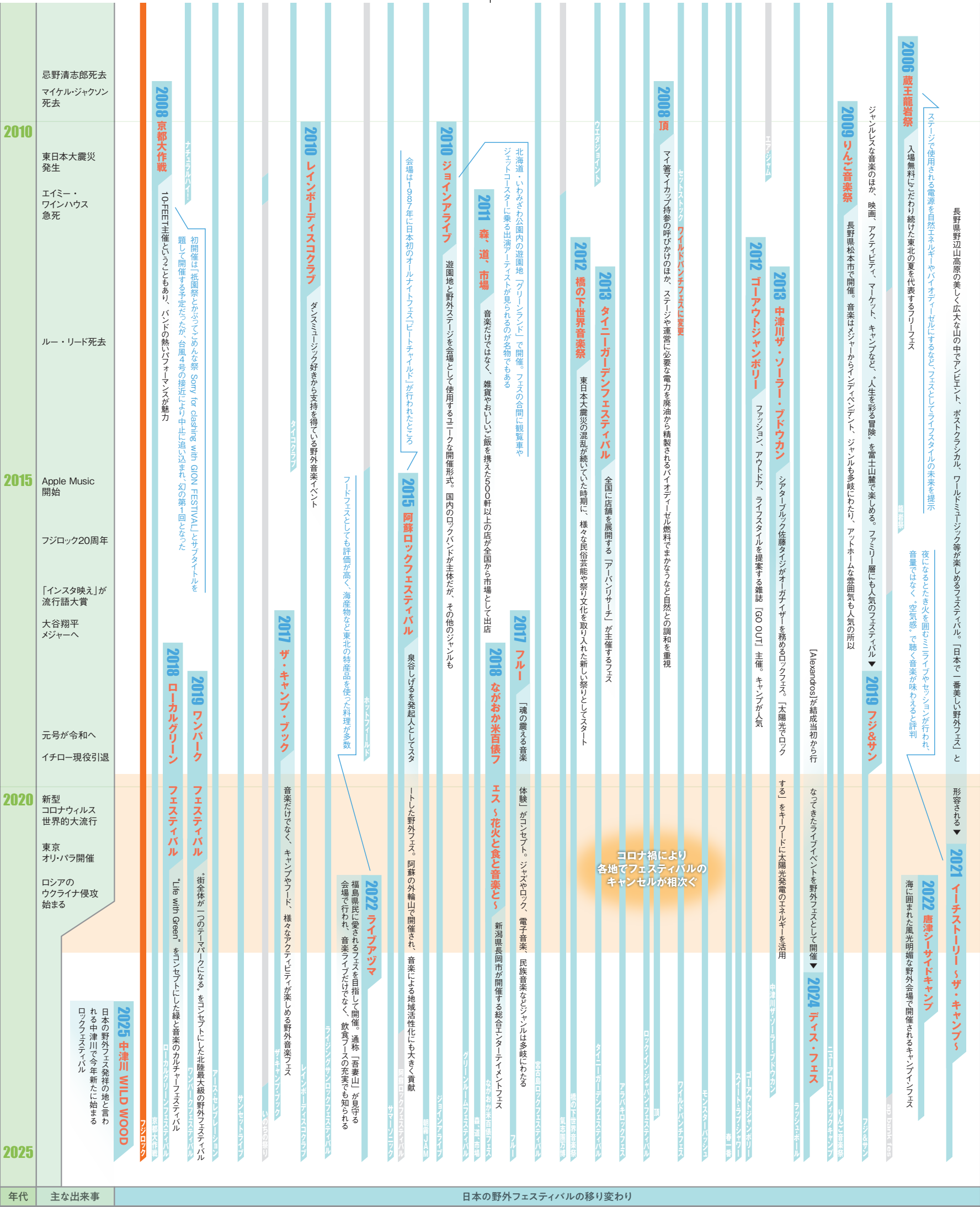


日本野外フェスティバル 新年表

フジロックをはじめ、現在行われている日本の代表的な野外フェスティバルはいつ誕生したのか。音楽史に残っている70～80年代の「野外コンサート」も広義としてとらえ、その移り変わりをみてみよう。

年代	主な出来事	日本の野外フェスティバルの移り変わり	海外の代表的フェス
1965	ベトナム戦争勃発 フラワー・ムーブメント	1965 ウッドストック・フェスティバル 米国ニューヨーク州にて開催。当初は有料で計画されたが、予想を上回る来場者で管理不能となり、事実上のフリーコンサートに。40万人を動員した一度限りの伝説的イベント	
1970	ビートルズ解散 ジミ・ヘンドリクス、ジャニス・ジョプリン死去	1970 ニュー・ロック・ジャム・コンサート 日比谷野外音楽堂で開催。入場料が10円だったことから「10円コンサート」が通称。主催者は元フィンガーズのギタリスト成毛滋。バンドや所属会社を超えて、ロック啓蒙を目的とした総決起集会的なイベントとなった	1970 グラストンベリー・フェスティバル 英国サマセット州ワージリアムで毎年開催が続く世界最大規模の音楽フェスティバル。ファッションやアート、演劇、サーカスなど様々なエンタメを楽しめる
1975	ベトナム戦争終結 アップルコンピュータ設立	1971 箱根アフロディTEE ピンク・フロイト初来日。日本勢は南こうせつ&かぐや姫、赤い鳥、尾崎紀世彦、モリスなど	1981 ロックンロール・オリンピック 仙台市の音楽事務所が主催し、所属するハウンド・ドッグの太友康平が、スネーク・ナシでミッドジャンクションに呼びかけて始まった。初回はA・R・B、ハウンド・ドッグ、R・C・サクションの3組。バンド・エラム時代を代表するイベントとなった
1980	タワーレコード日本1号店 CD登場 SMASH設立	1971 日比谷ロック・フェスティバル 1975 ジャパン・ロック・フェスティバル 日比谷野外音楽堂で開催。ヘッドライナーは日本のロックシーンを切り開いた加藤和彦。デビュー4年目の荒井由実も出演した	1985 レゲエ・サンスプラッシュ 仙台市の音楽事務所が主催し、所属するハウンド・ドッグの太友康平が、スネーク・ナシでミッドジャンクションに呼びかけて始まった。初回はA・R・B、ハウンド・ドッグ、R・C・サクションの3組。バンド・エラム時代を代表するイベントとなった
1985	ベルリンの壁崩壊	1975 ジャパン・ロック・フェスティバル 日比谷野外音楽堂で開催。ヘッドライナーは日本のロックシーンを切り開いた加藤和彦。デビュー4年目の荒井由実も出演した	1986 バニングマン 米国ネバダ州で毎年8月下旬～9月初めに開催される、ユニークで大規模な自己表現の祭典。何もない砂漠の真ん中に「ブラック・ロック・シティ」という町が築き上げられ、貨幣経済を排除した物々交換・贈与文化が基本となる
1990	湾岸戦争勃発 尾崎豊急死 カート・コバーン急死	1977 ビートチャイルド 熊本黒阿蘇で行われた。当時日本初のオールナイト・ロック・フェスティバル。ザ・フルーバーズ、レッド・ウーリアーズ、岡村靖幸、ハウンド・ドッグ、B・O・W、ザ・ストリート・スライダーズ、尾崎豊、渡辺美里、佐野元春らが出演した	1999 ラッシュ・ボール 関西を代表する大規模ロックフェス
1995	インターネット普及	1979 ジャパンジャム 湘南江の島コトハバーで開催。ビッチ・ボーイズ、ハート、ファイヤーボール、TKOが出演。前座で登場したのはサザンオールスターズだった	2002 ボナール・ミュージック・アンド・アーツ・フェスティバル 米国テネシ州マンチエターの6600エーカーもの広大な農場にて毎年6月中旬に開催される音楽と芸術の祭典
2000	アメリカ同時多発テロ iPod登場 iTunes Store開始 レイ・チャールズ死去	1984 アトミック・カフェ・フェスティバル 映画「アトミック・カフェ」の上映運動に由来するフェスティバルで、「音楽を通じて反核・脱原発を訴えていく」がテーマ。加藤登紀子、浜田省吾、宇崎竜童、尾崎豊、ザ・フルーバーズ、スターズ、SON、B・O・Wなどが出演した。2011年ラジオック内で復活	2005 ap bank fes 小林武史、櫻井和寿（ミスチル）らを中心としたBis、Bisがホストを務め、各アーティストをライブを行うスタイル
2005	YouTube開始 iPhone初代モデル日本発売 Spotify開始	1987 ビートチャイルド 熊本黒阿蘇で行われた。当時日本初のオールナイト・ロック・フェスティバル。ザ・フルーバーズ、レッド・ウーリアーズ、岡村靖幸、ハウンド・ドッグ、B・O・W、ザ・ストリート・スライダーズ、尾崎豊、渡辺美里、佐野元春らが出演した	2005 ニューアコースティックキャンプ O・Oが発起人となりスタートしたキャンプフェス。アーティストがキャンプ場で中泊しながらライブを行う



Text by Tomoko Fukutaki

半世紀にわたる日本の野外フェスティバルの流れを俯瞰する

アメリカでウッドストックが開催された同年となる1969年、日本の野外フェスティバルを語る上で重要な「全日本フォークジャンボリー（中津川フォークジャンボリー）」が岐阜県で産声を上げた。フォークソングや反戦思想を融合させたこのフェスは、若者にとって社会的なメッセージを共有する場となり、音楽と政治が変わる重要なイベントとなった。しかし、アーティストやロック好きの学生たちが自主的に開催していたため、70年代を迎えるころには継続的な運営は困難となっていた。その後、90年代後半から2000年代前半にかけてフェスの成長期が訪れる。とくにSMASH主催で始まったフジロック

フェスティバルは、1997年の初回こそ台風直撃で失敗と言われたが、その後新潟県・苗場スキー場に会場を移し成功を重ねたことで、大型野外ロックフェスティバルとしての存在を不動のものとしていく。どのフェスよりも音楽の多様性や環境への配慮を重視し、音楽と自然の共生をテーマにしたスタイルを確立したのがフジロックだった。2005年から2015年にかけての10年間は、言わば“フェス成熟期”とも言えるだろう。2000年にスタートしていたサマソニックやロック・イン・ジャパン（ロッキン）などの都市型フェスが盛況を見せたほか、キャンプを主体としたフェスや、

地域の魅力にフォーカスした小～中規模クラスの個性的なイベントが次々と開催。ファッション業界やメディア発の野外フェスも話題となった。そして2020年以降、コロナ禍によって多くのフェスが開催の危機に直面したことは記憶に新しい。大規模な集まりが制限され、大半のフェスが中止を余儀なくされた。しかし、その逆境においても開催をいち早く実現したフジロックが牽引役となり、多くのイベントが開催を継続。音楽の多様性やサステナビリティ、コミュニティ意識の大切さが改めて見直される中、今年も全国各地で多彩なフェスが開催される予定だ。